

(資料1)

馬越長火塚古墳群 (まごしながひづかこふんぐん)

- 1 所在地 豊橋市石巻本町字紺屋谷 18-2外 38筆等
- 2 面積 15,683.66㎡
- 3 概要

馬越長火塚古墳群は、豊川流域の左岸の段丘上に位置する豊橋市石巻地区に所在する。今回古墳群の構成要素として指定されたのは馬越長火塚古墳、大塚南古墳、口明塚南古墳の3基であり、各古墳は西から東に入り込む谷によって挟まれ、西に向かって緩やかに下る段丘上に位置する。

馬越長火塚古墳は墳長70mの前方後円墳であり、墳丘は、地山を削りだした下段と、盛り土をした上段の2段築造である。墳丘はほぼ全面葺石で覆われている。上段の規模は後円部の径が31m、高さが5.5m、前方部が長さ31.5m、くびれ部の幅が15m、くびれ部付近の高さが3.5mとなっている。上段の後円部中央が著しく高まっており、かつ前方部が低く細長いという特徴は、西日本各地の6世紀終わり頃の首長墓にいくつか認められる。

後円部の南側には全長17.5m以上となる横穴式石室が開口しており、前庭と羨道、玄室とで構成されている。前庭長は5.75m以上、羨道と玄室の長さ11.75m、石室最大幅2.35m、最大高2.95mであり、羨道と玄室は立柱によって区別され、さらに玄室も立柱で前後2室に分けられる複室構造となっている。玄室の平面形が胴張りとなっており、天井石の縦断面は連続する孤状をなし、奥壁は1枚石が使用されていることは、典型的な三河型の横穴式石室であることを示す。

石室内からは、鉄地金銅装馬具や豊富な玉類、大量の須恵器が発見されている。馬具は新羅のものを祖形として列島で生産された初期段階の棘葉形杏葉である。

玉類はガラス製トンボ玉や、大型の琥珀製棗玉、金銅製空玉がある。トンボ玉の中には、2色のガラスを重ねて巻き付けた重層玉のほかに、斑点文の切子玉や線状文と斑点文の複合した丸玉など、国内では例を見ないものが見つかっている。古墳が築かれてから半世紀ほど後に行われた墓前儀礼に伴う須恵器群も前庭で発見されている。これらはその他の多様な副葬品とともに平成24年に重要文化財に指定されている。

出土した馬具などから、馬越長火塚古墳は6世紀末に築造されたと考えられている。同時期において、東海屈指の規模を有する前方後円墳である。

大塚南古墳は、馬越長火塚古墳の南西50mに所在する直径19mの円墳、口明塚南古墳は、馬越長火塚古墳の北西60mに所在する直径23mの円墳である。それぞれ改変は受けているものの、残存状態は比較的良好である。墳丘の中央には南に開口するとされる横穴式石室が存在し、天井石は失われているが、石室の下部は比較的良好に残っている。

大塚南古墳からは鉄地金銅装花形鏡板付轡てつじこんどうそうはながたかがみいたつきくつわと雲珠・辻金具うず つじかなぐが発見されている。また口明塚南古墳からは金銅製毛彫り馬具片が出土している。それぞれの古墳は、馬具と一緒に出土した須恵器の年代から7世紀初頭に続いて築造されたと考えられている。

以上のように、馬越長火塚古墳群は、6世紀末から7世紀はじめにかけて続く首長墓の系譜であると考えられる。

馬越長火塚古墳の墳形及び中央の工房で製作され、地方の有力者に与えられたと考えられる金銅装馬具やその他の多様な副葬品から、被葬者は大和王権との関わりが深い人物であったと考えられる。一方、横穴式石室は典型的な三河型のものであり、被葬者は三河地方の有力者であったことも推定される。

文献によれば、6世紀の東三河の豊川流域には「穂国」ほのくにが存在していたとされており、馬越長火塚古墳群は穂国を統治していた穂国造ほのこくぞうの代々の墓であると考えられる。東海地方の古墳時代後期から終末期の首長系譜のあり方を探る上できわめて重要な古墳群である。



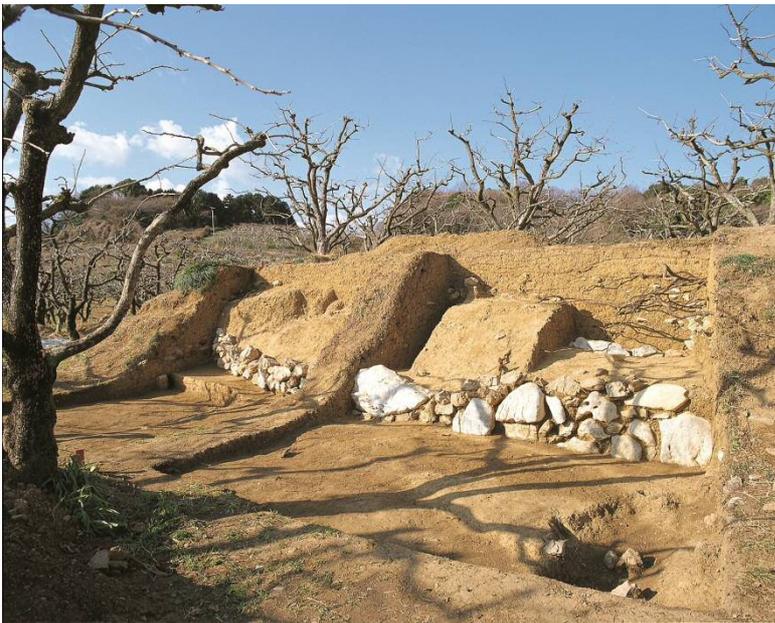
馬越長火塚古墳群（全景）（豊橋市教育委員会提供）



馬越長火塚古墳群（馬越長火塚古墳 横穴式石室）（豊橋市教育委員会提供）



馬越長火塚古墳群（大塚南古墳）（豊橋市教育委員会提供）



馬越長火塚古墳群（口明塚南古墳 調査風景）（豊橋市教育委員会提供）